

最果ての啓蒙

— トマス・ヘップバーンの経済思想と
18世紀オークニー諸島 — (2)

The Enlightenment Afar: The Economic Thought of Thomas Hepburn and Eighteenth-Century Orkney (2)

古 家 弘 幸

A tract titled *A Letter to a Gentleman from his Friend in Orkney, containing the True Causes of the Poverty of that Country* (1760), by Thomas Hepburn (1727?-77), a little-known Orkney Presbyterian minister, casts new light on the Moderate economic thought of the Church of Scotland in the eighteenth century. Written in 1757, Hepburn's *Letter* lively described from his own firsthand experience why the Orkneys were left in poverty, in contrast with mainland Scotland becoming increasingly wealthy under the Union of 1707.

Throughout his *Letter*, Hepburn held local Orkney lairds responsible for poverty in Orkney. Especially, Hepburn criticised the widespread oppression by the lairds, and their faction in a lawsuit called the Pundlar Process ongoing in Edinburgh at that time, in which the lairds as plaintiffs alleged that the weights by which the feu-duties were payable to the Earl of Morton had been augmented no less than three-fifths above the original standard in the Earldom estates. In due course, Hepburn defended Morton, whose business-like resolve to introduce modern standards suitable for the new, expanding market economy under the Union, provoked a widespread resistance among the local lairds.

Richard Sher has argued that the economic thought of the Moderate literati of Edinburgh, where 'improvement' was most advanced, could be characterised by their primary concern for the moral and social ramifications of economic development. Eighteenth-century Scotland, however, 'improved' unevenly from region to region, and consequently, the economic thought of the Moderates of Edinburgh had a wider, nationwide scope and more various concerns. These included the root cause of poverty in the remote islands like the Orkneys, where the

benefits of 'improvement' and expanding commerce had not yet been felt.

Hiroyuki Furuya

JEL : B19, N93

キーワード : トマス・ヘップバーン、オークニー諸島、貧困、圧政、パンドラー訴訟

Key words : Thomas Hepburn, The Orkney Islands, Poverty, Oppression, The Pundlar Process

III 『オークニー諸島の貧困』とスコットランド啓蒙

(承前)

2. 「農業における改良の欠如」

以上のような文脈の中で出版された『貧困』は、パンドラー訴訟におけるモートン伯爵の擁護を念頭に、オークニー諸島の貧困の責任を当地の在地地主層に帰せつつ、貧困を活写し「改良」の必要を説く構成を取る。例えばオークニー諸島の貧困の原因の一つとヘップバーンが見る「農業における改良の欠如」の背景として、オークニー諸島の大部分の地主には農業の隆盛をもたらしているイングランドの地主階級に見られる慈愛が完全に欠けているとヘップバーンは述べる。在地地主は、貨幣地代の代わりに現物地代、短期の借地契約や借地契約更新料、非常に多くの際限のない奉公、数々の辛苦を小作農に押し付け、改良への熱意を押しつぶし、農業は発展せず、住民の生計が貧しくなってしまう (Letter, 16/訳 (1), 85)。

ヘップバーンが長老教会の牧師としてオークニー諸島のバーセイへ赴任した頃、現地では土地の再編が進められていた。耕作地と放牧地が「まな板」(planks) などと呼ばれたひとまとまりの区画に整理統合され、土地が分割されていたかつての時代よりも耕作が容易になった。1760 年頃のバーセイでは、ひとつの「まな板」が約 23 エイカー (93,000m²) もあり、18 世紀後半のオークニー諸島の村落 (shead) の標準的な大きさとなる約 1,600 平方ファゾム (5,400m²) よ

りはるかに大きかった (Thomson [1987], 200; Thomson [1995], 58; Wenham [2001], 59-60)。

しかし「まな板」への土地の整理統合は、実際には実効性のある「改良」からは程遠く、単に旧来の土地制度の綻び直してしかなかったと、現在では評価されている。「改良」以前の農業が穀物栽培中心であったのに対して、18世紀の「改良」は家畜の飼育に比重を移すことを意味し、共同地の廃止など大きな変革を伴う企てであった。自らの都合に合わせて断片的に導入できるものではなく、土地の整理統合を始め、囲い込み、排水法、輪作法、牧草や蕪の生産、畜産など、新しい農法をすべてセットにして体系的に取り入れる必要があった。「まな板」は土地の部分的な整理統合でしかなく、複数の借地農への土地の共同貸借や細切れの小区画など、古い慣習も残存した。むしろ中途半端な形で土地が「まな板」に整理統合されてしまったため、後に旧来の土地配分法 (run-rig system) を抜本的に廃止するに際して困難さえ生まれた。「まな板」は結局、パーセイの土地耕作法を「改良」するには至らなかったと見られる (Thomson [1987], 200, 205-6; Thomson [1995], 58-9; Thomson [2003], 97)。

オークニー諸島では農地の大部分で、旧来の土地配分法の下で耕作が行われていた。土地がばらばらの細長い小区画に分割され、それらを耕作する複数の借地農に共同で貸借されていたため、個々の創意工夫が「改良」に活かされにくく、生産性が低かった (Thomson [2003], 94)。

また日雇いの小屋住み農 (cottar) が耕作や作付け、収穫、脱穀、運搬などに使役され、借地農の従事する耕作地に交じって細切れの小区画を貸借していた。スコットランド本土では、「改良」が遅れていた東北部でも小屋住み農が1760年代から1770年代頃には消滅したのに対して、オークニー諸島では残存した。「改良」の到来は19世紀半ばまでずれ込み、旧来の農業の低生産性を長く引きずることとなった (Jones [1998], 173-5; Thomson [1987], 199, 223)。

このような1750年代の現地の状況下で、イースト・ロジアン出身のヘップバーンの目にはオークニー諸島の農業が未発達に見えたことは不思議ではないが、その責任をほぼ一方的に在地地主層に問う点が、『貧困』の顕著な特徴である。オークニー諸島では在地地主と借地農の協力が完全に欠如しており、

地主層が「改良」の手本を示すことは全くなく、農業の発展を促進することこそ自身の利益になることが分かっていないため、小作農の向上心を妨げるとヘップバーンは批判する。農業はひどく未発達のみであり、収穫は悪く、農具も貧弱である (Letter, 16-9/訳 (1), 85-6)。放牧でも停滞が見られ、適切な飼育ができていないため家畜は小型であり、頭数も羊毛生産も増えない (Letter, 19-20/訳 (1), 86-7)。ヘップバーンが赴任していた頃のオークニー諸島は、ローランドより少なくとも半世紀は農地改良への試みが遅れていたが、ヘップバーンはイングランドの地主階級とオークニー諸島の在地地主層を対照させておきながら、ユニオン体制の恩恵が遠方のオークニー諸島にはまだ及んでいなかったことがオークニー諸島の貧困の大きな原因であるという、より客観的な状況には、あまり興味を掻き立てられなかったと見える。

3. 「製造業と水産業の軽視」

当時のオークニー諸島で営まれていた製造業は、モートン伯爵によって導入された亜麻糸の紡績業であった。ジャコバイトの反乱鎮圧後、英国政府はさらなる反乱防止のため、ハイランドに投資することで貧困に対処しようと、1746年に英国リンネル会社 (British Linen Company) を設立した。伯爵はこの英国リンネル会社を通じて紡績業をオークニー諸島で興し、当地の安い賃金水準を活用してニューカッスルなどイングランド東岸やシェトランドに市場を開拓し、農業をしのぐほどの輸出産業に育てた。紡績業は在地地主層と商人層に多大の利潤をもたらしたが、同時に女性にも雇用を与える上で大きく貢献した (Jones [1998], 176-7; Thomson [1987], 214-5; Wenham [2001], 164, 271-2)。

ヘップバーンは、紡績業がオークニー諸島の住民に多額の現金収入をもたらし、特に最貧層に分配された所得が困窮での飢え死にから彼らを救うなど (Letter, 20/訳 (1), 87-8)、モートン伯爵による所領経営で生活水準が向上したことをオークニー諸島へのユニオン体制の恩恵として評価しつつ、在地地主層による「製造業と水産業の軽視」を貧困の原因として批判する立場に立つ。当時の紡績業は、家内工業的な事業の性格から、紡績業を営む在地地主から支配下の借地農や小作人が亜麻糸の現物を地代として要求されるなど、犠牲を強

いる側面があった。とりわけ家庭を作業場とする女性労働力は搾取の対象となりやすかった。またオークニー諸島の紡績工は、エディンバラに比べると25%も安い賃金しか得られず、しかも現金ではなく密輸された酒類とオランダ製のたばこで支払われていた (Jones [1998], 176-7; Thomson [1987], 214-5; Wenham [2001], 164, 271-2)。

ヘップバーンは密輸品での支払いに関して、勤労や人々の健康と風紀に対してこれ以上に破壊的なものはないと在地地主層を批判する。また紡績業を営む在地地主層による借地農や小作人の酷使など、経営者としての地位の乱用も槍玉に挙げる (Letter, 21/訳 (1), 88)。

漁業に関しては、オークニー諸島において最も軽視されている部門とヘップバーンは見なしていた (Letter, 22/訳 (1), 89)。18世紀には魚価が低迷していたこともあり、季節限定のカニ (lobsters) 漁を除いては商業目的ではなく、専ら自らの栄養源としての必要を満たすためのみ行われた。あくまで農業の片手間であり、農業ほどの比重を占めたことは19世紀の一時期に至るまでなかった (Shearer [1966], 33-5)。シェトランド諸島経済の主要部門であった無甲板船によるはえ縄漁業や、オークニー諸島沿岸でのニシン漁に関しても、前者は1790年代まで、後者は19世紀初頭まで、ほとんど発展を見なかった (Thomson [1987], 217-8)。ローランド出身のヘップバーンから見れば、当時のオークニー諸島で漁業が未発展であったことは否定できなかったであろう。

ただしオークニー諸島では、遠洋漁業に従事する人の数は18世紀から19世紀にかけて急激な増加を見た。船舶や航海法などの技術的な発展を背景に、ユニオン以降、オークニー諸島の住民の多くがイングランドのスループ帆船 (一本マストの縦帆の帆船) に乗ってアイスランドやグリーンランドまで漁業に出かけた (Jones [1998], 177; Thomson [1987], 218)。盛んになったクジラ漁では大西洋を渡ってカナダにまで進出した。1670年に認可されたハドソン湾会社 (Hudson's Bay Company) は1702年以降、大部分の人員を自社船の英国での寄港地であったオークニー諸島で採用した。1779年には530人の従業員のうち416人がオークニー諸島出身であった。カナダへ行けばオークニー諸島の小作人の少なくとも二倍以上は稼げたので、遠洋漁業の魅力は大きかった

(Allan [2002], 171-2; Jones [1998], 178; Thomson [1987], 218)。

ユニオンによって、北米大陸などイングランドの植民地は、オークニー諸島に限らず、スコットランドの上層・中層階層に有望な機会をもたらした (Devine [2005], 26)。遠洋漁業やクジラ漁、ハドソン湾会社への出稼ぎは貴重な現金収入をもたらしたが、若年労働者層がエディンバラ、ニューカッスル、ロンドン、さらには北米へ移住する結果となり、オークニー諸島内での慢性的な労働力不足と賃金上昇をもたらした (Thomson [1987], 220)。

ヘップバーンは水産業の経済的な有利さを高く評価していたが、オークニー諸島では 18 世紀を通じて漁業が極めて軽視されてきたため、ハドソン湾会社などの公益事業に多くの優れた水夫を供給しながら、英国における船乗りの最高の育成所のひとつとなり損ねていると考えていた。その原因に関してもヘップバーンは、借地農層との対立などで、漁業など公共の利益となる事業を推進していくのに十分に必要の団結が困難になるほど社会を分裂させたとして、在地地主層側に責任を帰している (Letter, 22/訳 (1), 89)。むしろ遠洋漁業に労働力を取られたせいで、オークニー諸島近海での商業漁業が発展しなかった可能性については、ヘップバーンの考慮外であった。

4. 「破壊的で違法な交易」

ヘップバーンは密輸が、過去 30 年に渡ってオークニー諸島では急速に広がってきたと述べ、毎年密輸で持ち込まれるオランダ産の蒸留酒とタバコ、フランス産のブランデー、ワイン、ラム酒、茶、コーヒー、砂糖などの価値は、年間の地代の三分の二に匹敵すると推定している。そして密輸が盛んになっている原因をも、在地地主層の指導力の欠如に求め、オークニー諸島では住民が対立して他のどんな立案に際しても協力ができない一方、密輸のように健康と富に対して破滅的で、人々全体の風紀に対して破壊的なものだけは、社会全体の同意と一致団結をもって続けられていると皮肉っている (Letter, 23-4/訳 (1), 89-90)。

ユニオン後のスコットランドでは、「英国」(Britain) という当時の新しい国家形成に後押しされた市場経済の拡張や市場の論理の浸透が進むにつれて、

輸出向けの家畜のための囲い込みなどが、1724年の「水平派」(Levellers)の激しい抵抗を生み¹⁾、密醸造、沿岸部での密輸、広範な脱税が、当時のユニオン体制下での市場経済化に伴う新しい関税・租税制度への反発から広がった(Devine [2005], 24-5; Whatley [2000], 53)。収税吏や税関に対する襲撃を含む「消費税暴動」(Excise Riot)は、市場経済化に対する抵抗運動であり、エディンバラで1736年に起きた「ポーティラス暴動」(Porteous Riot)に代表される一連の大衆暴動は、散発的で個々のケースごとに特定の目的を持っていたが、1750年代に至るまでローランド地方ではしばしば起き、行政側を苛立たせたと見られる(Allan [2002], 116; 近藤・編 [2002], 34-52)。

オークニー諸島でも、農業が住民の生存の最低限を提供する水準に止まっていた背景から、「商人地主」(merchant laird)とも呼ばれた在地地主層によって広く密輸が行われていた。大部分の地代収入が現物地代であったため、それら穀物をスコットランド本土、アイルランド、シェトランド諸島はもとより、ノルウェーやバルト海に至る遠隔地へ輸出して貨幣収入に変える必要から、在地地主層は必然的に交易にも従事せざるを得なかったのである(Ferday [1980], viii, 27; Thomson [1987], 207; Wenham [2001], 15)。しかしヘップバーンの目には、これらの事情は在地地主層の指導力の欠如に勝る貧困の要因としては映らなかったわけである。

ユニオン後のスコットランドの文脈で密輸を批判するヘップバーンの議論は、ヒュームやスミスの議論と同様に、当時のユニオン体制とその下で進展した市場経済化を擁護する立場を共有していたと言える²⁾。スコットランド啓蒙

-
- 1) 清教徒革命から名付けられた「水平派」は、スコットランド南西部のダンフリース地方やギャロウェイ地方の小借地農や小作人の集団で、ユニオン以降のイングランドからの需要と輸出奨励金の増額で利益の上がるようになった家畜業を拡大しようとした地主層による大規模な囲い込みに反抗して、蜂起した。この地方は、主教制に反対して長老制維持のために誓約(Covenant)を結ぶ運動(1638年、1643年)で大きな役割を果たすなど、もともと反体制運動の伝統が根強い地域であった。ハイランドでも、とりわけ「改良」が加速した18世紀後半には、新しい地主制度に対する抵抗が散発的ながら増えていった(Allan [2002], 116)。
 - 2) ヘップバーンと同様に密輸をオークニー諸島の破滅の原因とみなして批判した18世紀の論者に、ヘップバーンとほぼ同時代人であったジョージ・ユーンソン(George Eunson)がいる。ユーンソンは、密輸がオークニー諸島の在地地主層を茶などの不法収益で肥やすことで他の住

の「ポリティカル・エコノミー」は、ユニオン体制の確立とその結果としての市場経済の拡張を、富の増進や財政危機、貧困問題の解決に活用し得ると見なして観察・分析した点に一つの特徴があると見ることも可能であるが (Furuya [2003])、ヘップバーンの『貧困』では、パンドラー訴訟を背景とした在地地主層批判のスタンスが明確であった分だけ、この特徴が顕著であったと言える。

5. 「奢侈」

ヘップバーンが奢侈をオークニー諸島の貧困の原因として挙げる理由は、それが住民の勤勉によって購入されているわけではないと考えていたからである。オークニーのような閉鎖的な諸島では、一族は血縁で互いに結ばれており、血縁は盛衰よりも永続するため、多くの対等でない婚姻が存在し、自身の勤労の報酬に合わせて生活水準を決めるわけではないからとヘップバーンは分析している。彼らは夫婦のうちの裕福な方の親戚の作法や慣習を模倣して生活水準を決めるので、スコットランド本土よりも奢侈がより広範に行き渡るのである。その結果、オークニー諸島ではスコットランドの最も富裕ないくつかの州よりも、生み出される富に比例してあらゆる種類の酒、装飾品が疑いなく多く消費されており、交易が繁栄し勤勉によって富が獲得されている場所よりも有害であるとヘップバーンは論じる (Letter, 24-5/訳 (1), 90-1)。実際に当時のオークニー諸島で奢侈を維持するために使われた最大の財源は、濡れ手で粟とも言えるケルプの生産であった³⁾。ケルプは貧困層に雇用を与え、過去 20 年に渡って毎年英貨 2,000 ポンドの現金収入をオークニー諸島にもたらしたとヘップバーンは推定している (Letter, 26/訳 (1), 91-2)。

18 世紀のケルプ生産は、農業用の肥料だけでなく、スコットランドのローランドやイングランドの石鹼やガラスの製造業、繊維産業に重要な材料を提供するなど、漁業よりも重要であった。海岸沿いに大量に打ち上げられる海藻を採取し乾燥させて燃やし、硬いガラス状の滓 (さい) を取り出して船に積み込

民を抑圧すると批判した (Eunson [1788], 61-3)。ユーンソン自身、元は密輸業者であったが、後に関税監督官に転じるなど、興味深い経歴の持ち主である (Wenham [2001], 35)。他に Wenham [2001], 180, 215-8 を参照。

3) コンブ目、ヒバマタ目の漂着性の大型褐藻。焼いた後のケルプ灰からヨードを採る。

んで輸出するだけの単純な労働集約的産業であり、ただ同然の原材料と安価な労働力を大量に利用できたため、コストは極めて低く、言わば濡れ手で粟の高収益産業であり、原料の海藻が豊富なスコットランドのハイランド西部や諸島、特にヘブリディーズ諸島ではかつてないほどの富を地主層にもたらし、増大する人口を支えた (Allan [2002], 96; Devine [2005], 86; Jones [1998], 175; Shearer [1966], 38-9; Thomson [1987], 207, 228)。

オークニー諸島ではケルプ生産が繁栄を極めた 1770 年代から 1820 年代までは「ケルプ時代」(Kelp Years)とも呼ばれ、この間にオークニー諸島の在地地主層は英貨 100 万ポンドを超える利潤を手にしたと見られている。彼らの地代収入の約三倍である。最盛期には 3,000 人がケルプ生産に従事し、1800 年頃には輸出額の三分の二を占めるほどであった (Jones [1998], 175-6; Shearer [1966], 39; Sinclair [1791-99], vol.7, 455; Thomson [1987], 207, 211-2, 228)。

手取り早く現金収入を稼げる手段であったことから、オークニー諸島の在地地主層はケルプ生産に飛び付き、所領の借地農や小作農を駆り出すなど、その運営管理を自らの監視下で独占した。最大の受益者はケルプ生産を指揮監督し、収益を地代の増額で吸収して、船舶も所有していた在地地主層であったが、オークニー諸島では雇用を得た貧困層にも恩恵は及び、茶や服地などの奢侈品が一般にも広まった (Devine [2005], 89; Jones [1998], 175-6; Sinclair [1791-99], vol.7, 540; Thomson [1987], 207, 221)。

他方で、低コストのケルプ生産は投資をほとんど必要としなかったため、農業とは異なり、その収益は「改良」に用いられることなく浪費された。こうして奢侈が広がり、オークニー諸島の在地地主層は主都のカークウォールにタウンハウスを建てるなど、支出を急増させた (Jones [1998], 176; Sinclair [1791-99], vol.7, 540-1; Thomson [1987], 211-2)⁴⁾。

4) オークニー諸島ではケルプ生産などの製造業が在地地主層に手頃な現金獲得手段を提供したせいで、時間も資本もかかる農業の「改良」が遅れたとの評価がある (Thomson [1987], 205-6)。反対に、ケルプ生産などの製造業の発展こそが 1750 年代以降、オークニー諸島の生活水準を徐々に改善し、資本蓄積を進め、19 世紀以降の本格的な「改良」の時代を準備したと見る論者もいる (Jones [1998], 156, 173)。

ヘップバーンが『貧困』を執筆していた時期には、ケルプ生産は急拡大の途上であり、在地地主層に広がる奢侈は勤勉の裏付けがないままに濡れ手で粟の収益を浪費しているようにしか見えなかったとしても不思議ではない。ヘップバーンは当時のオークニー諸島の輸入と輸出を三対四と見積もり、輸出によってオークニー諸島の財貨が出て行き、引き換えに得られた貿易黒字が在地地主層による奢侈に浪費される結果、「この国は貧しいに違いない」という結論は避けられないと論じている (Letter, 26-7/訳 (1), 92)。

しかし実際には、ヘップバーンが任地を離れた 1770 年代からオークニー諸島は「ケルプ時代」に入った。しかもフランスとの和平後の 1820 年代には安価な輸入品が価格を暴落させ (Devine [2005], 92)、ケルプ生産が衰退したのと入れ替わるように、蓄積された資本を活用して 1830 年代には農業の「改良」が本格化した (Shearer [1966], 39-40)。結果的には在地地主層による奢侈がオークニー諸島を貧困化したわけではなかったと見ることもできるであろうが、むしろそれゆえに、奢侈の広がりをも貧困の原因として在地地主層に責任を問うヘップバーンの議論の一貫性が、ここでも際立つこととなる。

6. 「法律の効力を巧みにかいくぐって行われる種類の圧政」

在地地主層による暴政と圧政に対するヘップバーンの批判は、『貧困』の主要論点である。「法律の効力を巧みにかいくぐって行われる種類の圧政」とは、短期の借地権、現物地代、新規借地契約料や借地契約更新料、不明瞭なまま際限なく強要される奉公などであり、これらは絶えず「改良」を妨げ、借地農を貧困と従属状態に貶めるとヘップバーンは批判する (Letter, 27-8/訳 (1), 92-3)。

在地地主層の所領では、多くの借地農が三人の地主に仕えており、それらの地主はすべて、彼らが共同で配下に置く借地農から好き勝手に奉公を要求するとヘップバーンは批判する。オークニー諸島には、様々な種類の過酷な負担に加えて、その三年ごとの借地契約更新料が年間の地代を超える所領がいくつかあるともヘップバーンは指摘している。モートン伯爵が配下の家臣である在地地主に対して、大麦の年貢として英貨 4 シリングを、あるいは麦芽の年貢として英貨 7 シリング 6 ペンスを要求するのに対して、在地地主のなかには恥知

らずにも自身の借地農から前者として英貨 5 シリングを、後者として英貨 10 シリングを要求する者がおり、これは卑しい地主が持つ残酷さであるともヘップバーンは批判している (Letter, 31-2/訳 (1), 95-6)。

パンドラー訴訟を原告側で率いたジェイムズ・ステュアート卿は、実際に自身の所領の借地農や小作農に対する数々の圧政で悪名高い。所領内の住人の連れ去り、監禁、暴行、奉公の強要、伝統的に認められてきた泥炭の採取権に対する課徴金の導入、共同の放牧地の不法な囲い込み、借地農や小作農の住居への不法侵入、家畜や所持品・金銭の不法な押収、恣意的な料料、海岸に打ち上げられた難破貨物の占有などが指摘されている (Fereday [1980], 38-40; Letter, 48/訳 (2), 95-6)。また卿のバーレイ島の所領では、軽装備の木製の鋤を用いるなど、施肥、耕作法ともに未発達であり、牧畜でも家畜が放し飼いにされ、豚が鼻で地面を掘ったあとに作物を植え付けるなどと皮肉られていた (Letter, 19-20/訳 (1), 87; Shearer [1966], 27-9)。島内に市場がなく現金収入が得られなかったため、大部分の地代は現物で徴収され、加えて借地農は卿から奉公を要求されるなど、生活水準は低かった。農業だけでは自給できず、漁業やケルプ生産でしのぐ状態が続いた。収穫期の労賃も安く、日雇い契約が多かった (Shearer [1966], 29-30; Sinclair [1791-99], vol.15, 301, 310)。農業収穫の上がない島であったことから、航海や交易が重要であり、遠洋漁業や英国海軍、ハドソン湾会社などへ人材を取られる結果にもなった (Shearer [1966], 40-2; Sinclair [1791-99], vol.15, 311)。

他方、卿の死後、その所領を継承し、パンドラー訴訟で原告側を率いたギャロウェイ伯爵は、モートン伯爵領に劣らず優良な地所をオークニー諸島に持っており、しかも階級でも爵位でも同等であったにもかかわらず、その伯爵領の借地農層は、オークニー諸島で最も卑しい家臣の借地農層よりも悲惨な境遇に置かれているとヘップバーンは主張する (Letter, 29, 32/訳 (1), 94, 96)。この論点はパンドラー訴訟においても浮上した争点の一つであった (Morton [1758b], 16-7)。

オークニー諸島における農業、水産業、製造業の復興は、在地地主層が彼ら自身の利害を見極めてそれらを援助するよう尽力しない限り、ほとんど不可能

であるとヘップバーンは述べている (Letter, 31/訳 (1), 95)。そして在地位主層による圧政により、オークニー諸島の社会が分断され、モートン伯爵によって着手された亜麻糸の紡績業など、いくつかの貴重な「改良」が未完成のまま放置され、貧困からの脱却が困難になっていると、ヘップバーンは在地位主層批判を締めくくるのである (Letter, 56-7/訳 (2), 102)⁵⁾。

IV おわりに

18 世紀のユニオン体制下のスコットランドでは、政治はロンドンの議会の影響を大きく受けていたが、オークニー諸島も例外ではなかった。ジャコバイトの反乱失敗で政治的に不安定な時期に終止符が打たれ、ロバート・ウォルポール首相の後継者の勢力が政権での地歩を固めた。したがってペラム首相 (Henry Pelham, 1694-1754; 首相在任 1743-54) と、後継のニューカッスル公爵 (Thomas Pelham Holles, Duke of Newcastle, 1693-1768; 首相在任 1754-56, 1757-62) の協力が得られる限り、モートン伯爵のオークニー諸島での影響力も揺るぎないものであった。ヘップバーンが『貧困』を執筆、出版したのも、このような状況下であった。しかし 1766 年にニューカッスル公爵が引退し、その保証が無くなったとき、伯爵はパンドラー訴訟では勝訴したとはいえ、オークニー諸島のけんか腰の在地位主層に嫌気が差し、同年 7 月にローレンス・ダングラス卿 (Lawrence Dundas of Kerse, 1712-81) が英貨 63,000 ポンドでオークニー諸島とシェトランド諸島の伯爵領の買い取りを持ちかけた際、所領を売り払ってしまった (Eunson [1788], 98; Manuscript papers relating to the Earldom of Orkney)。パトロンだった伯爵の死後、ヘップバーンも 1771 年にはオークニー諸島を離れ、故郷のイースト・ロジアン地方に聖職者として

5) オークニー諸島の在地位主層による圧政への批判は、先述のジョージ・ユーンソンによっても展開されている。オークニー諸島では在地位主層が、勤労ではなく密輸などで不法に蓄積した富によって地位を保持し、権力を握って住民を抑圧し、風紀や社会を破壊し、政策を歪め、国の富を損なっているとユーンソンは述べている (Eunson [1788], 64-5, 67-8, 70-1, 74, 84-5)。ユーンソンの最大の標的は、モートン伯爵からオークニー諸島の地所を買収したローレンス・ダングラス卿の子息で、当地の在地位主となったトマス・ダングラス卿 (Thomas Dundas of Kerse, 1741-1820) であった (Eunson [1788], 55-6, 74-83)。

戻った。

ローレンス・ダンダス卿は衣料品商の子息で、ジャコバイトの反乱でスコットランドに駐留する政府軍側のカンバーランド公爵に付いて軍事物資納入業者として財を成し始め、七年戦争（1756-63年）で巨万の富を築いた武器商人であった。ユニオン体制下の市場経済の拡大の波に乗って台頭した大商人の一人で、物資の供給以外では、銀行業や海運業でもこのような大立者が出現した。彼らは「新しい富」（new money）をつぎ込んで所領を買収することで、地方の地主階層の仲間入りを果たそうとした。工業化以前の社会は、富の偏在という特性を持つが、18世紀スコットランドも例外ではなく、1770年には地主階層が成人男性の約2%に限られていたとされる。中でも92人の大地主がスコットランド国内の地所の大部分を握り、ダンダス卿は、オークニー諸島とシェトランド諸島の他にもスターリング州の地所を購入するなど、バックルー公爵、ハミルトン公爵に匹敵する最大規模の地主となった。1768年にはパンドラー訴訟でモートン伯爵と争ったギャロウェイ伯爵の所領も買収し、自身の新しい地所を封建時代顔負けの限嗣相続財産にしまった（Allan [2002], 112; Lee [2005], 137; Soltow [1990], 40-1; Thomson [1987], 204, 232）。モートン伯爵の支配下にいたオークニー諸島の在地地主層が、封建時代以前の自由保有地主としての特権を伯爵のような封建的上位地主層のせいで自身が失ったことこそ、当時のオークニー諸島の貧困の原因だと強弁していたことから考えると、実に皮肉であった。

長老教会穏健派の経済思想は、「改良」が最も進んでいたエディンバラ近辺を拠点とした聖職者グループに関しては、シャーが提示した通り、イングランドとのユニオン体制下で進展した経済発展の有害な派生效果への関心が強かったと言える。しかし「エディンバラの穏健派」の内部でも、オークニー諸島のような遠隔地に赴いたヘップバーンのように、「改良」のイデオロギーの言語を用いた分だけヒュームやスミスほど客観的とは言えないまでも、富裕化する社会の中の「貧困」を「ポリティカル・エコノミー」に近いスタンスで描写した経済思想も存在した。「エディンバラの穏健派」の中ではヘップバーンのみ

が、経済を主題とした単著である『貧困』を出版し、極端なほど首尾一貫した経済思想を提示したことを考えると、シャーの性格付けには不備があると言わざるを得ない。

『貧困』のスタンスは、バンドラー訴訟を背景としたヘップバーンの在地位主層批判、モートン伯爵擁護で首尾一貫していた。その特殊な背景が『貧困』をして、市場経済の拡張を、具体的・現実的な状況下での貧困問題の解決策として、あるいは富裕の増進の現実的方策として打ち出し推奨する議論を貫かせ、現実批判ないし政策提言の実学という啓蒙思想の性格を極端なまでに打ち出すこととなった。スコットランド啓蒙の思想は、フランスにおける啓蒙思潮と同様に、イングランドの名誉革命（1688-89年）がもたらした政体が可能にした自由と商業の繁栄に対する是認に基づいていた。スコットランド啓蒙は、イングランドとのユニオン体制下、個人の自由・財産権、商業の拡大、富の増進、華やかな文化など、オーガスタン時代のイングランドをモデルとしてスコットランドを「改良」する運動であった。その主な担い手はスコットランドの特定のエリート層で、彼らは富裕な中産階層として現地社会から意図的に距離を置き、ユニオン体制下の「英国」という新しいアイデンティティの形成こそ、市場経済の拡張と自由な政体を通じて当代の様々な問題を解決し得る万能薬と考えた（Murdoch [1998], 39, 97-8, 104-5; Phillipson [1987] [1989] [1993] [2010]）。アンシャン・レジームの下にあったフランスの啓蒙思想家たちが、英国の立憲君主制を準拠として、眼前の宗教や諸制度の非合理を批判したように、ヘップバーンもユニオン体制下で見られた「改良」をモデルとして⁶⁾、「エディンバラの穏健派」の立場からオークニー諸島の現状を批判した

6) 先進的なイングランドをモデルとする啓蒙の立場からスコットランドの「改良」を推奨した論者は、ユニオン体制下で拡張する市場経済に合わない旧来型の農法を、「改良」を停滞させる不合理的なシステムと見なして批判したが、これらの「改良」のイデオロギー論者はヘップバーンのように、スコットランドの現状を批判して自らを啓蒙の側から提示することに自己の利益を見出していた場合も多く、その議論は実態以上に誇張される場合もあった（Devine [2005], 73-4）。反対に実践的な改良家は、ユニオン体制には反発しつつも、地域の自律性を維持するために自ら農業の現場で「改良」に取り組み、啓蒙のイデオロギーとしての「改良」を軽蔑していた場合も多かったのである。したがって「啓蒙」と「改良」の立場は、単純な対応関係にあるわけではない（Campbell [1982]）。

と言える⁷⁾。

そしてイングランドの地主階級とオークニー諸島の在地地主層を対照させた点などに表れているように、『貧困』は当時の新しいユニオン体制下における様々な利害対立と政治的抗争の中で、もはや地域社会の枠の中で人格と道徳に訴える発想を超え、全国的・国際的な経済発展を見渡して、あえてイングランドとのユニオンを推し進める側に立った。この点で『貧困』は、市場経済の浸透を、保護規制のシステムおよび有機体的しがらみからの解放につながると見て肯定的に捉えたスコットランド啓蒙の「ポリティカル・エコノミー」の特性の一つを典型的に示した。国外ではあまり知られていないものの、スコットランド国内では、ユニオン体制が続く 21 世紀の現在に至るまで、『貧困』の記述形式を継承している『スコットランド統計報告』(1791-99 年)と並んで折に触れ再版され読み継がれてきたことも不思議ではない。

ジョン・シンクレア卿の呼びかけでスコットランド教会牧師による教区経済の記述を集めた『スコットランド統計報告』は、旧来の土地耕作法の廃止や共有地の分割・囲い込みなど、「改良」の先進地エディンバラ近辺を一つのモデルとして、市場経済を活用した「改良」への方策が現場に即して実践的に論じられており、ヘップバーンの記述が一つの先駆的モデルとなっている。オークニー諸島の教区の記述が特に充実していることも、偶然ではない (Thomson [2003], 95)。ジョージ・バリーによるカークウォール・聖オラ教区 (Marwick [1975]; Sinclair [1793], vol.7, 529-69, 特に 537-8)、ウィリアム・クラストンによるクロス・バーネス教区 (Sinclair [1791-99], vol.7, 450-99, 特に 475, 481-2, 491) の記述などに、ヘップバーンの影響が濃厚に見られる⁸⁾。「エディンバラの稔

7) スコットランド教会穏健派と啓蒙の関係については、Sher [1985], 63-4, 89, 211-2, 328 を参照。

8) ジョージ・バリーによるカークウォール・聖オラ教区の記述は、『スコットランド統計報告』の中でも最高水準を示す報告書であり、1975 年には単著として刊行された (Marwick [1975])。バリーはカークウォール・聖オラ教区を、当時のオークニー諸島全般の状況との関連で記述しているため、ヘップバーンと同様、オークニー諸島が置かれていた不利な条件への目配りが行き届いており、当時の経済状態を正確に理解するのに有用である。バリーはオークニー諸島出身ではなく、スコットランド本土のペリック州の出身であったが、1782 年にカークウォールで聖職叙任され、1793 年にはオークニー諸島のシャピンゼー島へ牧師として移った。歴史研究に没頭し、死去した 1805 年には、500 ページを超える『オークニー諸島の歴史』が刊行された (Marwick [1975], 5-6)。

健派」の経済思想は多様で全スコットランド的な問題関心の拡がりを持ちつつ、啓蒙としての役割の一端を果たしたのである。スコットランド啓蒙の「ポリティカル・エコノミー」全般に関しても同様の側面を、本稿で試みたように制度や伝統の地域的特性に着目することで、今後より明らかにしていきたいと考える。

(完)

参考文献

(トマス・ヘップバーンの著作)

Hepburn, Thomas [1885] (1760), *A Letter to a Gentleman from his Friend in Orkney, containing the True Causes of the Poverty of that Country*, William Brown, Edinburgh; 古家弘幸・訳「トマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』(1760年)(1)」『経済学論究』60(1), 77-97; 古家弘幸・訳「トマス・ヘップバーン『オークニー諸島の貧困』(1760年)(2)」『経済学論究』60(2), 85-103.

Haliburton, Simon, and Thomas Hepburn [1810] (1761), *Memoirs of the Life, Character, Sentiments, and Doctrine of that Celebrated Pulpit Hero, Mas-John Magopico, Minister of Muchtiwharrock, and thereafter (By a Divine Call to a Better Stipend) translated to the Kirk of Starnikillock*, Edinburgh.

(一次文献)

The Caledonian Mercury [1720-1859], Walter Ruddiman and Company, Edinburgh.

Church of Scotland, General Assembly, *The Principal Acts of the General Assembly of the Church of Scotland* の各年次版.

Eunson, George [1788], *The Ancient and Present State of Orkney, particularly the Capital Borough of Kirkwall*, Newcastle-upon-Tyne.

Earl of Galloway, Alexander Stewart [1757], *State of the Process, Alexander Earl of Galloway, ... against the Earl of Morton*, Edinburgh.

Hibbert, Samuel [1822], *A Description of the Shetland Islands, comprising an Account of their Geology, Scenery, Antiquities, and Superstitions*, Archibald Constable and Co., Edinburgh.

- Mackenzie, James [1836] (1750), *The General Grievances and Oppression of the Isles of Orkney and Shetland*, Laing and Forbes, Edinburgh.
- ‘Manuscript papers relating to the Earldom of Orkney’, Papers in connection with the sale of the Earl of Morton’s estate in Orkney and Shetland to Sir Lawrence Dundas, containing abstracts of rental of the Earldom of Orkney and Lordship of Shetland, 1764-1767; Handwritten 39 papers, D38/1718, Orkney Archives, Kirkwall.
- Orkney: Kirkwall and St Ola 1793: A Reprint from the First Statistical Account of Scotland* [1975], The Pentland Press, Thurso.
- Earl of Morton, James Douglas [1758a], *Memorial for James Earl of Morton, Defender, against Alexander Earl of Galloway* . . . , Edinburgh.
- Earl of Morton, James Douglas [1758b], *Additional Memorial for James Earl of Morton, against Alexander Earl of Galloway* . . . , Edinburgh.
- ‘The Earl of Morton: Document’, Manuscript Transcription of comments apparently by the Earl of Morton on the proposed publication of “A Letter to a Gentleman from his Friend in Orkney, containing the True Causes of the Poverty of that Country”, c.1760, D1/375, Orkney Archives, Kirkwall.
- Pundlar Process: Earl of Galloway and Udallers of Orkney v Earl of Morton*, Printed legal papers, Orkney Library, Kirkwall.
- Sinclair, Sir John [1791-99], *The Statistical Account of Scotland: Drawn up from the Communications of the Ministers of the Different Parishes*, vols.2, 7, 14 and 15, William Creech, Edinburgh.
- ‘Roll of the Members of the Select Society’, Manuscript, MS. 25453 (35), National Library of Scotland, Edinburgh.

(二次文献)

- Allan, David [2002], *Scotland in the Eighteenth Century: Union and Enlightenment*, Longman, London.
- Campbell, R. H. [1982], ‘The Enlightenment and the Economy’, in *The Origins and Nature of the Scottish Enlightenment*, eds., R. H. Campbell and Andrew S. Skinner, John Donald, Edinburgh, 8-27.
- Clarke, Tristram [1987], ‘The Scottish Episcopalians 1688-1720’, PhD Thesis, University of Edinburgh.
- Clarke, Tristram [1992], ‘The Williamite Episcopalians and the Glorious Revolution in Scotland’, *Records of the Scottish Church History Society* 24.
- Clouston, J. Storer [1927], *The Orkney Parishes*, W. R. Macintosh, Kirkwall.

- Craven, J. B. [1883], *History of the Episcopal Church in Orkney 1688-1882*, William Peace and Son, Kirkwall.
- Devine, Thomas M. [2005], 'The Modern Economy: Scotland and the Act of Union', in *The Transformation of Scotland: The Economy since 1700*, eds., Thomas M. Devine, Clive H. Lee and George C. Peden, Edinburgh University Press, Edinburgh, 13-33.
- Drever, W. P. [1914], *Udal Law in the Orkneys and Zetland*, W. Green and Sons, Edinburgh.
- Fereday, R. P. [1980], *Orkney Feuds and the '45*, Kirkwall Grammar School, Kirkwall.
- Fraser, W. [1876], *Earls of Cromartie*, Edinburgh.
- Furuya, Hiroyuki [2003], 'The 'private vices, public benefits' controversy: the response of the Scottish Enlightenment to Bernard Mandeville', PhD Thesis, University of Edinburgh.
- 古家弘幸 [2008], 「スコットランド啓蒙時代の光と影—オークニー諸島の事例から」『日本西洋史学会第 58 回大会報告要旨集』(日本西洋史学会), 40.
- 古家弘幸 [2009], 「トマス・ヘップバーンと 18 世紀オークニー諸島」『経済学史学会大会報告集—第 73 回全国大会』(日本経済学史学会), 118-123.
- Furuya, Hiroyuki [2010a], 'Thomas Hepburn and Eighteenth-Century Orkney: the Moderate Economic Thought of Edinburgh Reconsidered', in The 14th Annual Conference of the European Society for the History of Economic Thought (ESHET), *The Practices of Economists in the Past and Today*.
- Furuya, Hiroyuki [2010b], 'The Pundlar Process and Eighteenth-Century Orkney', in The University of Reading Early Modern Studies Conference, *Controversy, Protest, Ridicule, Laughter, 1500-1750*.
- Hill, Brian [1996], *The Early Parties and Politics in Britain, 1688-1832*, Macmillan, London.
- Jones, Caroline Wickham [1998], *Orkney: A Historical Guide*, Birlinn, Edinburgh.
- 近藤和彦 [1993], 『民のモラル—近世イギリスの文化と社会』山川出版社.
- 近藤和彦・編 [2002], 『長い 18 世紀のイギリス—その政治社会』山川出版社.
- Lee, Clive H. [2005], 'Economic Progress: Wealth and Poverty', in *The Transformation of Scotland: The Economy since 1700*, eds., Thomas M. Devine, Clive H. Lee and George C. Peden, Edinburgh University Press, Edinburgh, 128-56.

- Lenman, Bruce [1982], ‘The Scottish Episcopalian Clergy and the Ideology of Jacobitism’, in *Ideology and Conspiracy: Aspects of Jacobitism, 1689-1759*, ed., Eveline Cruickshanks, John Donald, Edinburgh, 36-48.
- Marwick, Ernest W. [1975], ‘Introduction’ to *Orkney: Kirkwall and St Ola 1793: A Reprint from the First Statistical Account of Scotland*, The Pentland Press, Thurso.
- Matriculation Roll of the University of Edinburgh: Arts, Law, Divinity* [1933-34], Vol. I: 1623-1774, transcribed by Alexander Morgan, Edinburgh University Library.
- Murdoch, Alexander [1998], *British History, 1660-1832: National Identity and Local Culture*, Macmillan, London.
- Phillipson, Nicholas [1983], ‘Adam Smith as Civic Moralist’, in *Wealth and Virtue: The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, eds., Istvan Hont and Michael Ignatieff, Cambridge University Press, Cambridge, 179-202.
- Phillipson, Nicholas [1987], ‘Politics, Politeness, and the Anglicisation of Early Eighteenth-Century Scottish Culture’, in *Scotland and England 1286-1815*, ed., Roger A. Mason, John Donald, Edinburgh, 226-46.
- Phillipson, Nicholas [1989], *Hume*, Weidenfeld and Nicolson, London.
- Phillipson, Nicholas [1993], ‘Propriety, property and prudence: David Hume and the defence of the Revolution’, in *Political Discourse in Early Modern Britain*, eds., Nicholas Phillipson and Quentin Skinner, Cambridge University Press, Cambridge, 302-20.
- Phillipson, Nicholas [2010], *Adam Smith: An Enlightened Life*, Allen Lane of Penguin Books, London; Yale University Press, New Haven.
- 坂下史 [2002], 「地域社会のダイナミズム」、近藤和彦・編 [2002], 53-81.
- Shearer, John W. [1966], ‘South Ronaldsay and Burray: The Evolution of an Island Economy’, M. A. Honours Geography Thesis, University of Glasgow.
- Sher, Richard B. [1985], *Church and University in the Scottish Enlightenment: The Moderate Literati of Edinburgh*, Edinburgh University Press, Edinburgh.
- Smith, Adam [1977], *Correspondence of Adam Smith*, eds., E. C. Mossner and I. S. Ross, as vol. VII of *The Glasgow Edition of the Works and Correspondence of Adam Smith*, Clarendon Press, Oxford.
- Smith, John [1907], *Annals of the Church of Scotland in Orkney from 1560*, W. R. Mackintosh, Kirkwall.

- Smout, T. C. [1983], 'Where Had the Scottish Economy Got to by the Third Quarter of the Eighteenth Century?', in *Wealth and Virtue: The Shaping of Political Economy in the Scottish Enlightenment*, eds., Istvan Hont and Michael Ignatieff, Cambridge University Press, Cambridge, 45-72.
- Soltow, Lee [1990], 'Inequality of wealth in land in Scotland in the eighteenth century', *Scottish Economic and Social History* 10, 38-60.
- Thomson, William P. L. [1987], *History of Orkney*, The Mercat Press, Edinburgh.
- Thomson, William P. L. [1989], 'The Eighteenth-Century Church in Orkney', in *Light in the North: St Magnus Cathedral through the Centuries*, eds., Harry William MacPhail Cant and Howie N. Firth, The Orkney Press, Kirkwall, 57-79.
- Thomson, William P. L. [1995], 'The Landscape of Medieval Birsay', in *Northern Isles Connections: Essays from Orkney and Shetland presented to Per Sveaas Andersen*, ed., Barbara E. Crawford, The Orkney Press, Kirkwall, 47-75.
- Thomson, William P. L. [2003], 'Agricultural Improvement', in *The Orkney Book*, ed., Donald Omand, Birlinn, Edinburgh, 92-101.
- Wenham, Sheena [2001], *A More Enterprising Spirit: The Parish and People of Holm in 18th Century Orkney*, Bellavista Publications, Kirkwall.
- Whatley, Christopher A. [2000], *Scottish Society, 1707-1830: Beyond Jacobitism, Towards Industrialisation*, Manchester University Press, Manchester.
- Whiteford, D. H. [1965], 'Reactions to Jacobitism in Scottish Ecclesiastical Thought, 1690-1760', PhD Thesis, University of Edinburgh.